

[復刻版]昭和天皇の御巡幸 鈴木正男著発刊に思う

理事 袴田 忠夫

はじめに

[復刻版]昭和天皇の御巡幸 鈴木正男著が2024年4月18日に、ダイレクト出版株式会社から発刊された。この本は、終戦後行われた昭和天皇の全国御巡幸をまとめたものです。46の都道府県を巡った旅路の記録がつぶさに刻まれたまさに日本の国のカタチをあらわす1冊です。ただ、時代が昭和から平成、令和と移り変わるにつれ、御巡幸の記憶も徐々に薄れていき、この本は絶版となりました。しかし、この本から何にも歪められない大東亜戦争後の本当の日本の姿を知ってほしい。ボロボロの日本を甦らせた天皇と国民の遺産を後世まで残したい。

そして、終戦後の物語だからこそ、閉塞感漂う現代にも応用できる発見があるかもしれない。そんな思いから、ダイレクト出版株式会社が今回この本を復刻したということです。



昭和天皇の御巡幸

この本は、終戦後の全国御巡幸について綴られたものです。そこには、全国各地に贈られた御歌やメッセージ、国民とのふれあいや各地域の熱狂ぶりが、何の脚色もされず、ありのままに記録されています。頭が禿げてしまった原爆孤児にかけられた涙のメッセージ、陛下の来校と同時に、自然とはじまった国歌斉唱、戦争で兄を失った女子生徒との会話など、実際にあった歴史の1コマ1コマに触れることで、日本史上最大の危機をどのように乗り越えたのか？ 昭和天皇が日本人に残したかったメッセージは何なのか？ そもそも日本にとって、天皇と国民はどのような関係なのか？ 昭和天皇の全国御巡幸について理解できるだけでなく、世界中のどこにもない日本という国のアイデンティティをありありと実感できます。そうした歴史や皇室と国民の絆について知ることで、「日本人でよかった」といった母国に対する誇りや素朴な愛国心がフツフツと湧き出てきます。

日本郷友連盟はこれまで度々紹介してきたように、平成26年に「国民の物語としての日本の歴史」(日本郷友連盟ホームページ記載)を編集しました。この中で、昭和天皇の御巡幸について、昭和天皇と戦後と題し、次のように記述しました。

昭和天皇は、焦土と化した全国を巡り、国民を励ましたいと強く希望され、当時の宮内庁次長加藤進氏に次のように述べられました。

「この戦争によって祖先からの領土を失い、国民の多くの生命を失い、たいへんな災厄を受けた。この際、わたくしとしては、どうすればいいのかと考え、また退位も考えた。しかし、よくよく考えた末、この際は、全国を隈なく歩いて、国民を慰め、励まし、また復興のために立ちあがらせるための勇気を与えることが自分の責任とおもう。わたくしとしては、このことをどうしてもなるべく早い時期におこないたいとおもう。ついては、宮内官たちはわたくしの健康を心配するだろうが、自分はどんなことになってもやりぬくつもりであるから、健康とかなんとかまったく考えることなくやってほしい。宮内官はそのことを計画し実行してほしい」

終戦後、天皇陛下が全国を巡ることが決まってすぐ、GHQ高官たちは、「天皇のおかげで、父や夫が亡くなったのだから、天皇の権威は失墜し、天皇に対する信仰も崩れるだろう」「世界中を巻き込んだ戦争で最後まで抵抗し、敗北した日本。そんな国の君主が敗戦ムードの全国を巡れば、国民の怒りの矛先は陛下に向き、暴動になり、石でも投げつけられるだろう」と思っていました。なぜなら、これまで欧米では敗戦国のトップが悲惨な運命を辿っており、フランスを大帝国にまで導いたナポレオンも晩年には流刑地に送られ、ドイツのヒトラーは自殺、イタリアのムッソリーニは民衆の前で処刑されたからです。しかし、全国御巡幸がスタートすると、昭和天皇をお迎えした国民のよろこびはたいへんなものでした。戦後、現在の日本が見事に復興を果たしたのは、国民の努力の賜ものであることは勿論ですが、同時に昭和天皇があの大東亜戦争の責任を一身に負われ、国民を慰め励ましたい御心で、巡礼の行脚そのままに全国を行幸され、国民を感激させ奮い立たせたからでありました。そのことは、御巡幸の際に接した多くの国民の声が証明しております。昭和21年元旦、昭和天皇は新年恒例の歌会始において、次の御製を読まれています。

ふりつもる深雪にたえていろかへぬ松ぞををしき人もかくあれ

戦後、日本が敗戦、占領、飢餓の中で、生きるすべを失って啞然としている国民に対し、「ふりつもる深雪にたえよ」と励まされた御製です。昭和天皇は、このことを身を以って国民に示すべく全国を御巡幸されたのです。

本書には、昭和21年2月から始められ、昭和29年8月まで満8年半、行程3万3千キロ、総日数165日にも及ぶ昭和天皇の全国御巡幸が記されております。本書の筆者は、本書を執筆しつつ、何度も落涙して筆をおいたと述べています。

以下、本書における全国御巡幸時の昭和天皇と国民との触れ合いについて、抜粋し紹介することとしたい。

御巡幸第一歩の神奈川県

昭和21年2月19日、昭和天皇の御巡幸が決行された。これは皇室の永い伝統、しきたりの中でまったく破天荒のことであった。半年前には史上未曾有の敗戦の大事があり、国民は飢えており、極左勢力は「天皇制」打倒を叫んでおり、何が起こるか、誰も全く予想もつかなかった。特に神奈川県は、マッカーサー元帥が日本占領の第一歩を印し、横浜の山下町にあるホテル・ニューグランドを東京に進出するまで宿舎にして占領政策を開始した地で、アメリカ第8軍の司令部があり、横浜、横須賀、相模原、座間を中心に膨大な土地と建物、それに横浜

港と横須賀軍港の全施設が接收されて、至る所に星条旗が翻り、日本中で最も占領色の著しい県であった。それに加えて、旧横須賀軍港は復員軍人、引揚者の上陸地に指定されて、その收容施設があり、海外から着の身着のままの引揚者がひしめき合っていた。更にその上、昭和 20 年の米作は明治以来の大凶作で、神奈川県では、二月に入ると主食の配給はサツマイモや大豆などの代用食が主流となったが、それも 10 日以上遅配が続き、コメよこせデモが県下一帯に起きていた。

この日、午前9時御出門、全行程自動車を使われ、陛下の御服装は背広にソフト帽という御軽装で、供奉は松平慶民宮内大臣、藤田尚徳侍従長以下で、行幸主務官は筧素彦宮内省官房総務課長が務めた。先頭は占領軍のジープで、米兵とのトラブルの警戒に当たった。六郷橋を渡ると神奈川県である。この地帯は京浜工業地帯の中心であるが、全て一望の焼け野原である。やがて御車は第一の御視察地である昭和電工株式会社川崎工場扇町に到着した。陛下がご到着になると、待ち構えていたMPやGIが陛下を見ようとしてドツと押し寄せてきた。森社長は陛下をお迎えし、工場の現況を説明した。陛下は、森の説明の切れ目ごとに「あ、そう。あ、そう」といわれた。ところが、御説明申し上げている間、連合国の新聞、通信社のカメラマンや、写真機を手にしたアメリカ兵が群がって、天皇に向かって、こっちを向け、あちらを向け、と大声でうるさく叫び、しばしば天皇の体に障って、押したり、引っ張ったりした。占領軍は勝ったのだから、天皇を何とも思っていなかった。森は緊張して顔がこわばった。だが、天皇は何回もこづかれ、こっちが引っ張ると、あっちも引っ張るといのように、まるで、玩具にでもされるように、もみくちゃにされたが、全然、意に介されなかった。森の説明が終わるころには、一通り写真を撮ってしまったので、騒ぎはいくらか納まっていた。森は天皇が何もなかったように、平然と聞いておられるのを見て、「えらい我慢をなさった。申し訳ない」と思った。

陛下は、ここより更に鶴見の日産重工業本社工場に向かわれたが、ここでも大変であった。山本社長の御案内で工場内の作業の現場をご覧になり、約 40 分後、お帰りのため玄関を出られたのであるが、玄関前に駐車している御料車を見て驚かれた。物見高い米兵が、御料車の周囲を取り巻き、ある者はステップに乗り、甚だしきは屋根にまで登っているではないか。側近も驚いた、中には陛下に近づいてきて握手を求めようとする者もいる。MPと警察の努力で、これらを退去させ御発車になったが、まったく敗戦国の惨めさであった。午後は、稲荷台国民学校の焼け跡に建てられた戦災者用の共同宿舎を御視察になった。宿舎の近くで御下車になり、坂道を登って行かれる陛下を歓迎する大勢の人がいた。中には手を合わせて伏し拝んでいる人もあり、土下座の人もいる。陛下はいちいち丁寧に帽子を取って会釈なさる。陛下が宿舎にお入りになった。部屋の入口に立たれた陛下は「どこで戦災に遭ったのか」「この家は冬は寒くないか」と優しくお尋ねになる。御下賜と大きく書いた義足の箱があった部屋では「ご主人はどうしているの」という御下問があった。せき上げる涙で「比島・・・」という言葉しか聞こえなかったので、陛下は戦死したものと思われ「夫が亡くなって困っていることはないか」との言葉があったが「いいえ、負傷だけで今日も工場へ参っております」と夫人が申しあげると、「随分働いてくれたんだね」のお言葉に、夫人は涙に咽ぶ。復員軍人の家では「ご苦労だったね」と仰せられた。この共同宿舎での陛下のお言葉の響きは平素とはまるで違い、陛下ももしかしたらお泣きになっているのではないかと、お側の人がそっと御顔を拝し見たほどであった。この日の最後の日程はヤミ市の御視察であった。活気にあふれる状況をごらんになられ、午後 3 時 50 分、無事皇居へ帰られた。

御巡幸2日目の2月20日は、お召列車で午前10時半、久里浜駅に御到着、直ちに浦賀引揚援護局に向かわれた。この援護局は、前年の 10 月に開設された海外からの復員軍人、民間引揚者の受け入れ施設であった。他に舞鶴、呉、田辺(和歌山県)、博多、佐世保、鹿児島に開設された。この浦賀へは 22 年4月の閉局までに、

実に56万人が上陸した。陛下は援護局内の検疫所を御視察、奉迎の復員兵士一人一人に、「どこから帰って来たか」「食べ物はどうであったか」「戦争中は御苦勞であった」と御言葉をかけられ、陛下の御ねぎらいに、内地に帰ったばかりの兵士たちは栄光と感激に長い苦勞を忘れ、ただ感涙に咽ぶのみであった。次いで鴨居援護所にお成りになった。ここは浦賀造船所元工員宿舎を改造した粗雑なバラック建であった。陛下は各部屋を廻られて御勞りの御言葉をかけられたが、孤児室の前に哀れにも端座しているダバオより引揚げて来た幼い兄妹の姿が御眼に止まった。兄は12歳、妹は8歳であった。父はダバオで死亡、母は入院中であった。陛下は、「どこから来たの」「寒くはないか」とお優しい言葉をかけられた。豊原次長は、この時の感激を次の如く書きとどめている。> 嗚呼、彼の地に收容せらるる中、異境に病没せる彼等の父の靈も以て瞑すべし。横須賀共済病院に呻吟する彼等の母が此の事を聞き知らば如何ばかり感涙するであろう。児らよ、健かに伸びよ、忘るな此の御恩に誓って酬い奉らんことを。V そして、当の12歳の兄の呉服長盛君は、「僕はお父様、お母様よりかけて頂けないお言葉を天皇陛下様より頂いたときに、僕は一人で涙が出ました」と。誠に涙なくしては読めない。陛下は次いで馬堀援護所におなりになった。ここは元横須賀陸軍重砲兵学校であった。ここには南方より引揚げて来た将兵が二千五百人位いた。

その中に御巡幸前々日の17日、パラオ諸島から帰還して来た歩兵第五十九、第十五連隊三百人がいた。横須賀港に引揚船が入港すると江口八郎連隊長は全員に階級章を付けさせ、背囊を背負わせた。兵器は持っていないが、完全軍装である。腕に抱いた遺骨箱の中には奉焼したことになっている軍旗の遺片も入っていた。この三百名は宇都宮第十四師団の将兵であった。同師団は南京攻略戦、徐州会戦に身を挺して戦い、転じて満州チチハルに駐屯していたが、昭和19年春、中部太平洋パラオ諸島に出陣を命じられ、4月24日、無事パラオ本島に上陸、麾下の歩兵第五十九連隊(江口八郎大佐)はアンガウル島に、歩兵第二連隊(中川洲男大佐)をペリリュー島に配備したのであった。特に、ペリリュー島には、8日間に及ぶ米軍大機動部隊による艦砲射撃の後、9月15日、米軍の大部隊が上陸し、ペリリュー島が玉砕したのは、敵上陸以来2か月10日後であった。ペリリュー島の激戦は上聞に達し、御嘉賞の電報を賜ること実に前後11回に及んだ。大東亜戦争中、かような御激励を賜ったのは、この部隊のみである。この部隊の兄弟部隊が帰って来て、同日、この馬堀援護所にいたのである。そして帰国以来、週番肩章を付け、ラツパを以って平時の軍隊生活のまま、起床、点呼、消灯まで整然と行って一糸乱れるところがない。援護局の係員が驚いて、階級章を取るよう支持したが、江口連隊長は、「復員手続きが終わってこの兵舎を出るまでは、連帯を解散したわけではない。あくまで軍隊である」と述べて、これを拒否した。援護局の態度も尊敬の念に変わった。

この部隊は19日にここを出て故郷に帰ることになっていたが、一日延期してもらい、天皇陛下に帰還申告の上奏を願い出た。そして、そのことが実現したのである。空前絶後の行幸は、陸軍礼式令により陛下に敬礼した後、最先頭の江口連隊長が官姓名を名乗り、「臣八郎。不肖にして歩兵第五十九連隊長の負託の重きに応えず、戦敗れ、あまたの赤子を失い…」と涙ながらに報告文を上奏された。陛下は最後に「ご苦勞でした」と懇切なるおねぎらいのお言葉を下され、全員感銘し、涙を禁じ得ませんでした。陛下の、ただ一回の復員部隊お出迎いの行事は、占領軍政下の厳しい新聞の報道管制でいっさい公表されなかった。陛下の公式なお言葉は次の通りである。「パラオ集団はまことに善く統率力徹底して立派に戦闘し復員も善くできて満足に思う」陛下は江口連隊長の復員奏上を受けられ、御気色うるわしくお帰りの途につかれ、午後四時半、東京駅に着かれた。二日間にわたった最初の御巡行を何事もなく終えられ、当初は非常な御覚悟でお出ましになったのであるが、「日頃のご希望がかなえられ大変ご満足の御様子であった」と算主務官は書きとどめている。

新宿でわき起こった「万歳」の絶叫

東京都の御巡幸は昭和 21 年の 2 月 28 日と 3 月 1 日の両日であった。前年の 3 月 10 日と 5 月 25 日の大空襲により、都内は瓦礫の焼け野原である。この日、先ず御車は焼け残っている京橋の第一相互ビルに立ち寄り、屋上から焼け野原となった都心を展望され、次いで日本橋浜松を経て小石川区春日町の焼け跡に立てられたバラックの簡易住宅に御成りになった。この住宅は一戸当たりわずか六坪で、百件ほどがマッチ箱のように並んでいた。ここで被災者に慰めのお言葉をかけられ、窪町小学校、次いで早稲田の鶴巻小学校の授業をご覧になり、新宿御苑で御昼食後、新宿の伊勢丹百貨店で開催中の「平和産業転換展」を視察された。この頃、陛下の御巡幸を知った人々が、誰ということなく自然に伊勢丹前に集まり、その御出ましを今か今かと待っていた。

陛下が御視察を終えられて玄関に来られた。途端に、誰が音頭を取るでもなく、「天皇陛下万歳」「天皇陛下万歳」の声、絶叫が巻き起こった。陛下はハッとお立ちどまりになり、帽子を取って御応えになられた。万歳はいつまでも続いた。男も女も感激のあまり、涙をとめどなく流し、次第に万歳の声もかすれた。群衆は MP や警護の制止も振り切って車道にまで流れ込み、泣きながら万歳を唱え続け、陛下は帽子を振り続けられた。この誰言うことなく沸き上がった「天皇陛下万歳」の絶叫は、その後、陛下の御巡幸の先々で起こり興奮した大群衆が陛下をめぐめて殺到するのであるが、それは後述する。さて、陛下は万歳の声に送られて、次は世田谷上馬の元兵跡の戦災者収容所に御成りになった。陛下が一步構内に入られると、戦災孤児たちが手作りの日の丸の小旗を振ってお迎えした。陛下は二人に畳一枚という狭く粗末な宿舎の一つ一つを訪ねられ、戦災者にお言葉をかけられた。この日の最後の御立寄り先は、都立第一中学校であり、予定では三つの教室を御視察ということであったが、ほとんどの教室を廻られた。午後 3 時に皇居に御帰りになり、都内御巡幸の第 1 日目は終わった。

都内御巡幸の第 2 日目の 3 月 1 日は、先ず府中の戦災孤児収容所東光寮を訪ねられ、親を失ったいとけない子供たちを励まされた。次いで、稲城村の大丸稲城寮(引揚者寮)等にお立ち寄りになり、御昼食後、宮正織物合名会社で女工さんたちを激励され、御車は都立第四高等女学校に着いた。この女学校の校舎は戦災で跡形もなく焼けてしまったが、終戦後同校の先生と女生徒達が自分達の手で校舎を立て直そうと思い立ち、周囲から材木を入手し、苦勞して建てあげた手作りの校舎であった。それを知った宮内官が陛下に申し上げたところ「そんな感心なところがあるのなら、是非行ってみたい」と仰せられ、お立ち寄りが決まったということである。陛下が御車から降りられ、粗末なお立ち台に御立ちになり、岩崎校長が教師と生徒で力を合わせて校舎を建てたことを申し上げると、「よく建てられましたね」と繰り返し、お褒めのお言葉をかけられた。

校長先生の奏上が終わると、陛下は突然小屋のような職員事務所にお入りになられた。まったく予定外のことで、岩崎校長は慌てて陛下の後に続いた。陛下は、「職員生徒は食料に困ってはいないか」と御質問。そして外に出られ、四年生の生徒たちの前に進まれ、先頭の生徒に、「家は焼かれたか」と聞かれた。「はい、焼かれました」とお答えすると、「そう。でも早く校舎が建ってよかったね」と慰められた。陛下は整列している女生徒らに次々と優しい言葉をかけられた。「お家はどこ、焼かれたの」「学校が焼けて大変だったね」「校舎がよく建てられたねえ」女生徒達は感涙にむせんで声も出ない。こうして陛下は千三百人の職員、生徒らの感激の涙にぬれての御見送りのうちに御乗車になり、さらに、八王子市役所等にお立ち寄りの後、東浅川宮廷駅から御召し列車でお帰りになり、都下の御巡幸を終えられた。

後に、都立第四校女ではこの日の感激を「行幸記念録」にまとめており、一年生の遠山陽子さんが「天皇を拝

す」という題で次のように述べています。

>陛下は、お帽子をお取りになって、私たちに御会釈を賜りました。嗚呼、何という光栄、今迄御写真でしか拝した事の無かった天皇陛下が今、お帽子をお取りになって私たち女学生に御答礼あそばされたのであります。私は胸いっぱい感激で、只何もかも忘れ、全身を固くして陛下を仰ぎました。・陛下が壇上に御立ちあそばされて校長先生の申し上げる御説明に「おうなずきあそばされ、あちこち眺めさせられるお姿を、涙にかすんで拝しました。夏の暑い日、私たちが汗を流して一生懸命働いた跡をお目にかけるのだと思えば、今更に勤労した喜びが、湧き上がってくるのであります。・陛下は再び私たちの方へお近づき遊ばれました。私達は、自然と頭が低く下がりました。その時、「お家は焼けたの」という玉音に、はっとして頭を挙げると、「はい、焼けませんでした」という、中村さんの声が聞こえました。「あ、そう。それは良かったね。お家はどこ」と重ねての御下問。嗚呼、私は天皇陛下の玉音を拝聴することが出来たと言う感激とともに、この栄光に浴することが出来たと言う嬉しさで、畏れ多いこととは思いつつも、おなかの底からこみ上げる嬉しさに、眼元に浮かぶ微笑みをどうすることも出来ませんでした。<

繭の増産を御頼みになる陛下

昭和21年3月25日午前7時50分に皇居を御出でになり、宮廷列車で10時50分、高崎駅に御到着。直ちに国立高崎病院(元陸軍病院)を御訪ねになり、陸軍の復員患者の病床をねんごろに見舞われ、一人一人に御声をかけられた。ある重病患者は余りの畏さに上半身を起こそうとすると、陛下が、「そのまま」と御止めになり、「病気の状況はどうか、苦しいだろうね、痛むか、夜は眠れるか」「あ、そう。それはよかったね、一日も早く全快するよう大事にね」と慈愛溢れる御言葉を賜る。皆、御返事の言葉を発することが出来ず、感涙にむせび顔を上げることも出来ない。次いで看護婦達にも、「朝から晩までの看護で随分疲れるだろうね。体に十分注意して看護につとめるように」との暖かい御言葉に、乙女らの頬には涙が流れた。陛下は次いで富岡製糸所に着かれ、ここに集まった県下の養蚕家達に、養蚕事業の振興、繭の増産を「頼む」と御激励になった。この富岡製糸所は明治5年、近代製糸業創業のために明治政府が建設し、御奨励のために昭憲皇太后はじめ各宮妃殿下が、しばしば行啓された所である。その後、民間に払い下げられたが、日本製糸業界の中核をなし、以来、群馬県の繭の生産は日本一であった。戦災であらゆる工場が焼け落ちた当時、生糸は日本が輸出することが出来る唯一の物産であった。食料輸入の見返り物資は当時、生糸しかなかった。陛下が養蚕家達に特に「頼む」と仰せられた所以である。ここで是非触れられなければならないのは、昭和天皇の母君貞明皇太后の養蚕御奨励のことである。貞明様は、昭和22年秋に大日本製糸会総裁になられ、精力的に養蚕農家を廻られている。養蚕農家というのはほとんど山間にある。貞明様はそんなところを喜んで廻られ、みずぼらしい農家の蚕棚の中へも平気で入っていかれるのが常であった。

陛下はその後、前橋市に向かわれ理研前橋工場を御視察、前橋の戦災の中心地を御徒歩で350メートルほど歩かれて、その復興ぶりを御覧になった。奏迎の市民は万歳を連呼、熱狂して御迎えした。陛下は戦災者に御声をかけながら進まれたが、一人の子供が群衆に押されて転んだ。陛下は心配して御立ち止まりになったが、警察官が助け出したので安心してお進みになると、また一人子供が押されて倒れそうになった。陛下は「あ、危ないよ」と声をかけられた。「万歳」「万歳」に帽子を振って御応えになりながら御召自動車に近づき、御乗車になられたが、熱狂した人々がドッと押し寄せて御車を取り囲んでしまった。やっとのことで奏迎者をかきわけ、御車は県庁に到着した。県庁では知事室で県政一般の奏上を受けられたが、この知事室は昭和9年11月陸軍大演

習御統監の折り、御座所として 9 日間も御使用になった所であるので御感慨ひとしおであられた。県庁では、供出米に尽瘁(じんすい)する市町村長、農業関係者に対して食糧増産に励むよう御言葉があり、一同、挺身奉公を御誓い申し上げた。かく参拝者で黒山の前橋駅から御召列車に御乗車、万歳の連呼の中、御手を振られつつ前橋駅を発たれ、皇居へ還幸された。

戦後初めて中学生三千人が「君が代」を大合唱

神奈川県、東京都、群馬県の次の御巡幸先は埼玉県であった。昭和 21 年 3 月 28 日、原宿の宮廷駅を発たれ、10 時 10 分、熊谷駅に到着された。この熊谷市は、今次大戦で最後に空襲を受けた都市であった。前年の 8 月 14 日夜 11 時ごろ、皇居では終戦の大詔の録音がこれから行われようとしている時間であった。この熊谷への B 29 の来襲によって録音作業は一時中断したのであった。この空襲で熊谷市はすべてが焼け落ちた。業火は 15 日の朝まで燃え続き、死者は 200 人を超えた。陛下は焼け残った熊谷郵便局の屋上に立たれ、戦災復興の状況を御覧になり、次いで県立熊谷中学校に御成りになった。校庭には市内の中等学校生徒三千人が整列して御到着を御待ちしていた。陛下がお立ち台に立たれると、熊谷中学校、農学校、師範学校、高等女学校の若人三千人の「君が代」の大合唱が起こった。終戦以来、初めての大合唱である。皆、泣きながら一杯に歌った。陛下は、次いで足袋の生産日本一の行田を御視察になった。晩年の昭和 58 年に、「埼玉県の旅行 行田の足袋を思う」と題し、

足袋はきて葉山の磯を調べたるむかしおもへばなつかしくて

の御詠があるが、この御詠は今、行田市の心の支えとなり、市の中心地には立派な御製碑が建立されている。午後一時近く行田から埼玉村に御成りになり、ここでは麦畑に入られて農作業を御覧になり、農民に対し、「農機具類に不足はないか」「肥料はどうか」といろいろ御質問になり、「肥料が不足して大変苦勞だろうが一生懸命やってくれ」と励まされた。その後、屈巢村(現川里村)へ御成りになり、供出状況、ムシロや縄作りを御覧になった。次いで川口市に赴かれ、駅前通り 300 メートルを御徒歩で一万人の万歳の嵐にお応えなれながら鋳物工場を廻られた。真っ赤に溶けてドロドロとした鉄の湯が大きなひしゃくで掬い上げられ、鋳型に向かって走るさまや作業の工程を熱心に御覧になった。この頃、陛下もすっかり国民との対話に御慣れになられ、最初の頃のぎこちなさはまったくなくなり、ごく自然に御親しみ溢れる御口調で青年たちに、「どうだね。しっかりやっているかね」と、御気軽に問いかけられ、側近者たちも驚いた。かくして、埼玉県での御日程を終わり、午後 4 時過ぎに皇居に御帰りになったが、陛下には文字通り寸暇もない一日であられた。

御召列車の中で御仮泊

千葉県への御巡幸は、昭和 21 年 6 月 6 日・7 日の両日にわたって行われた。これまでの御巡幸は神奈川県、東京都は二日間であったが、皇居に帰られて、翌日再び行幸という二日間であり、群馬県、埼玉県は一日のみの日帰りであった。千葉県の御巡幸は最初から現地で御一泊の予定であった。お召列車を貨車引き込み線の「新生駅」に入れて、一晩、動かない汽車の中で陛下にお休み願うこととした。もちろん車内にはゆっくり休んでいただく寝台もなければ、入浴の施設もない。このことを陛下に申し上げると、「戦災の国民のことを考えれば何でもない。十日間ぐらい風呂に入らなくてもかまわぬ」との御返事をいただいた。この頃は食料事情がどん底で数週間の遅配や欠配は日常のことで、5 月 15 日、共産党主導のもとに「食料メーデー」が行われ、米よこせの赤

旗が皇居へ押し入った。5月24日、陛下は再びマイクの前に立たれ、「家族国家の美しい伝統により、同胞互いに助け合って食糧危機を乗り越えよう」との御趣旨の放送をされたのであった。

6月6日午前11時半過ぎに成田駅に到着された陛下は、同地方の各町村長、農業会長らに食糧増産を御頼みになられ、大戸村では御徒歩で農道を歩かれて農民を激励された。次いで、佐原市を経て銚子に御到着。市街の大半を焼失したその復興ぶりを御覧になり、その後銚子港に御成りになった。「天皇陛下万歳」の大歓声で迎えられた陛下は海に面した港の狭い道を、人波を押し分けるように御歩きになって岸壁に立たれた。その時、漁から帰ったばかりの船が近づいてきた。陛下はすかさず、「どうだ、獲れたか」と、漁船の漁師に向かって大声で呼びかけられた。漁師は両手に魚をぶら下げて、「こんなに獲れました」と、日焼けした顔をほころばせて大声でお答えした。「大漁だね」と、すかさず陛下は褒められて、ニッコリされた。そのことを、侍従長としてお側にあった

大金益次郎氏は著書「巡幸餘芳」の中で、この言葉の受け渡しは実に気合がピッタリして、而も和やかに朗らかに活気に充ち満ちた光景であったことが今でも忘れ得ない。Vと述べている。陛下は、次いでヤマサ醤油工場に御成りになり、午後5時15分、この日の御泊所である新生駅構内の御召列車に帰られたのである。御泊りされる車室は、昔の三等寝台車のように片側が廊下になっている狭い御休憩室で、小さなテーブルをはさんで一人掛の椅子が二つあり、その横にソファが二個、陛下はその一つを寝台とされることになっている。陛下は粗末な夕食をおすましになり、引き続いて、午後7時より9時まで7名の各界代表から御講義を受けられて、車内に御仮泊遊ばれた。

翌6月7日は快晴であった。未だ開けやらぬ午前4時頃から駅の柵外に人々が集まり始め、やがて黒山となった。誰一人声を発する者なく、ただ御目覚めを御待ちしていた。軽い朝食を召された陛下が、そのお姿をホームに現されると群衆の間から歓声が上がった。陛下がいったん車内に戻られ、御座所の窓を開けられると、民衆は熱狂して万歳の嵐となった。陛下は何度も何度もこやかに御会釈される。午前8時すぎ犬吠埼灯台に立ち寄られ、御召列車は午前11時過ぎ千葉駅御着。先ず農事試験場にも向かわれる御車に、市民が声の限り万歳を叫び、御車に取りすがって離れない。試験場から出られた陛下は市内東町二丁目で御車から降りられ、御徒歩で戦災の町を視察された。沿道は立錐の余地がないほどの大群衆である。それに御応えになる陛下も大変であった。陛下は、それから幕張町で麦作、甘藷床を御覧になり、更に県立厚生寮、習志野旧陸軍演習場の開拓状況を御視察になり、二日間の全予定を終えられ、午後4時45分、御還幸になった。

御製 たのもしく夜はあけそめぬ水戸の町うつ槌の音も高くきこえて

この御製は昭和22年1月23日の新年歌会始で発表された。お題は「あけぼの」であった。茨城県民はこの御製を拝して驚喜した。全県民は感動にひたり、また全国民も、陛下のこの御感懐を拝し、祖国再建への決意を新たにしたのであった。この御製の御歌碑は現在、水戸駅前にある。茨城県への御巡幸は、昭和21年11月18・19日両日であった。朝7時45分に東京駅を發たれて、先ず県北の日立市に11時に到着された。ここは日立製作所の本拠のある所で、戦災もひどい。昭和20年6月10日、7月17日、同19日の三回の空襲で壊滅的な被害を受けた。日立工場では八千名の従業員が整列して御迎えし、陛下は工場を廻られた。陛下は次いで市長の御先導で、市内新道通りを御歩きになり、戦災復興状況を御覧になり、宮田国民学校に御成りになった。宮田国

民学校の準教員、大井川啓子さんは次のように回想している。> 全身しびれるような緊張の内に陛下を我が校に御迎えする喜びに胸をとどろかせつつ、児童と共に御待ち申す数分。やがて息詰まるような沈黙の中を静かな靴音と共に尊き玉体をお現しになったのである。もう私の目には何物も無く、龍顔を真近に拝す栄光の余り唯々驚愕の念で一杯であった。今迄ひそかに想像申し上げていた陛下のいかめしさは微塵も無く、お優しい陛下であった。特に児童たちの上に注がれる御微笑みの御眼差し、十九年の生を受けて、初めて味わう至上の喜びに新たなる血潮の躍動を覚えた。(中略)陛下の大御心に報ずべく自己の与えられた職責を全うせねばならぬという自責の念と共に、今日の陛下の行幸を拝し奉りてほのぼのと国の夜明けを感じた。< 日立市の各地を御巡幸の後、午後3時、水戸市に入られた。水戸の戦災もひどい。しかし、水戸人は負けない。必死に復興に励んでいた。その復興ぶりを御覧になり、4時半に焼け残った県庁に入られて天覧品を御覧になり、夜は六人の方より、それぞれ10分間ずつの御進講を受けられた。

この県庁の行在所は昭和4年の陸軍大演習にも御泊されたところである。この日は、旧軍の営庭に八千名の児童、生徒らの奉迎を受けられた。陛下はツカツカと生徒らの前に近づかれ、お優しい口調で、問いかけられた。「お家は焼けたの」「はい焼けました」「それは気の毒だったね。お家の者は全部無事」「はい、全部無事です」「それはよかったね。みんな一所懸命勉強してくださいね」御下問にあずかった生徒は、紅潮した頬に涙を伝わせ、頭を垂れてしまった。居並ぶ友達も同様であった。次の御視察地に向かわれる陛下を、ワッとばかりに生徒たちは校門まで追いかけた。打ち振られる日の丸の小旗、万歳の絶叫が御車をつつんだのであった。

沼津駅プラットホームに三陛下 陛下のお帰りに共産党員も万歳を絶叫

昭和21年6月17・18の両日、静岡県を御巡幸になられたが、この日、天皇・皇后両陛下はお揃いで皇居を出られ、早朝7時半、東京駅をご出発になられた。それは、沼津御用邸に皇太后陛下(大宮様)をお見舞いなさるためであった。天皇・皇后両陛下は午前9時半、沼津駅に御到着になり、直ちに御用邸に入られた。天皇陛下は終戦以来、初めての御対面であられたが、御滞在僅かに二時間ほどで御用邸より御巡幸に出発された。皇后陛下は御一泊になられ、夜はゆっくり大宮様と御歓談遊ばされた。この日、天皇陛下は静岡県庁御泊り、翌18日浜松方面御巡幸、午後沼津駅御着、皇后陛下がその宮廷列車に御乗車になり、再びお揃いでお帰りになられたのであるが、大宮様が皇后さまをお送りして駅までお出ましになったので、ここ沼津駅のホームに三陛下がお揃いになるという極めて珍しい情景が展開した。この情景を坊城俊良皇太后大夫は、その著「宮中五十年」で次の如く記している。^ お召列車が沼津駅に止まると、天皇はまるで飛び降りられるようにして、直ちにホームに降り立たれ、つかつかと大宮様の前に走り寄られた。そしてうやうやしく、大宮様に手をさしのべられて、御召し列車の中に誘導された。そのあとから皇后も、あのふくよかな顔をほころばせて、ニコニコついて行かれ、やがて三陛下はおそろいで、御召し列車の中で、卓を囲んで、しばらくお話をされた。その光景の全てが、ホームに整列して送迎していた人々はもとより、駅前付近に雲集していた市民の群れにも、まる見えであった。たとえ行幸中の出来事はいえ、三陛下がおそろいで、お仲むつまじく語り合っている光景が、一般市民に拝されたということは、これこそ全く異例の事であった。名状し難い感動の高鳴りが、やがて群衆の中から「天皇陛下万歳」のさけびとなり、続いて誰が歌いだしたともない「君が代」の大合唱となった。老いも若きも、男も女も、この大合唱の渦の中にまきこまれて、沼津駅の広いホームを感動の嵐に押し包んでしまった。天皇はさっと立ち上がり、この群衆に応えられた。大宮様も、静かにお立ちになって、群衆の方へ向かわれた。天皇の御顔も、心なしかさすがにこわばっていられるように拝された。御召列車のすぐ傍らに立っていた駅長も、駅員たちも目を潤ませ、

頬を濡らしていた。群衆の一人一人も泣いていた。私もいつしか泣いていた。この日の、沼津駅頭の感激は、おそらく私の終生忘れ得ぬところであろうと思う。大宮様は、この感激の光景の中に、お召列車を御見送りになって、いとも御満足げに、御用邸に御帰りになった。V皇太后陛下は終戦直後に軽井沢に移られ、年末にこの沼津に移られたので、天皇・皇后両陛下との御対面は実に一年ぶりであった。

静岡県御巡幸の最初は沼津市の戦災復興の有様を視察されることであった。この沼津は御幼少の頃からのなじみ深いところであるが、すっかり焼け落ちた姿を痛ましげに御覧になった。次いで、清水市に日本軽金属清水工場を御訪問、ここはアルミ工場として軍需品を生産していたが、戦後はカリ肥料、食糧生産に転換していた。陛下は工員たちに、「よく働くね、しっかりやってくれ。肥料が沢山できれば、食料も沢山できるのだからね」と御激励になった。次に伝馬町国民学校に着かれたが、この戦災学校はひどかった。屋根がなく、土間にムシロを敷いた教室で、壁もない。雨が降れば休校である。陛下は御巡視中ときどき大空を見上げられ、「子供たちは気の毒だね」と大変心配になられた。その後、静岡市郊外の戦災者、引揚者の寮を廻られた。居住者の中には御巡幸反対の共産黨員もいたが、陛下はそんなことに関係なく、一室ごとに御慰問と御激励の御言葉をかけて廻られた。その共産黨員も、御帰りの時は御召車の窓すれすれに顔を寄せ、万歳を叫ぶ一員になっていた。大金侍従長は、その感激を次の如く書きとどめている。陛下の虚心な御行動の先々では、我々の複雑な先入観は、常に事実として、払拭される。そこで、我々はただ日本国民を見る。党派も階級も貧富も見えない。我々はただ日本人の血の叫び、魂の交流だけを感じる。党派も階級も貧富もその障害をなさない。陛下は、次に県立静岡中学校を御訪問になられたのち、御徒歩にて、市内両替町商店街の御巡幸となった。ひたすら陛下の御越しを御待ちしていた市民は、陛下を認めるや、声を限りに万歳を絶叫。人波は崩れ、少しでも前に、少しでも陛下の御傍へと願う市民の熱誠は、たちまち陛下を人波の中に埋めてしまった。鳴りやまぬ万歳の嵐。人々は感激に泣きぬれていた。かくして静岡県御巡幸の第一日は終わり、静岡県庁の御泊所に入られた。翌6月18日午前8時30分、陛下は浜松駅に御到着になった。一年前のこの日、浜松市は物凄い焼夷弾攻撃によって全滅した。その日に陛下は御成りになったのである。浜松市役所、名古屋鉄道局浜松工機部、浜松国民学校、日本楽器と御廻りになり、それぞれ御激励の後、天竜川農業水利改良事業出張所に着かれた。ここには浜名用水の取り入れ口があった。この水利により四万五千石の米の増産が可能であるとの説明に陛下は喜ばれ、更に赤佐村で田植えを御覧になり、その後島田、焼津両市での奏迎にお応えになり、沼津で皇后陛下が御同車され、お揃いで皇居へ帰られたのであった。

大群衆、天皇誹謗者を殺せ殺せと追い詰める

愛知・岐阜両県への御巡幸は昭和21年10月21日から26日までの6日間で、愛知県に三泊、岐阜県二泊の初めての長期御巡幸であった。豊橋駅に21日午後1時15分到着、群衆は駅前御料車を囲み万歳を連呼、公会堂までの道筋を埋め尽くした。公会堂屋上より焼け野原の市街を展望され、それから500メートルを御徒歩で八町国民学校へ向かわれた。両側は奉迎の人が一杯で、身動き出来ない。中には、前夜より徹夜で土下座してお待ちしていた50余名の人々もいた。岡崎へは三時過ぎに御到着、奉迎は豊橋に劣らなかった。ただちに県立追進農場に着かれて御徒歩で二十分にわたり御視察、研修生を激励され、次いで、沿道の歓呼に応えられつつ岡崎郵便局に御成りになって戦災の市街を御覧になり、屋上より大群衆に帽子を高く振られた。これより矢作農業会へお立寄りになり、西三河平野を潤す明治用水を御覧になり、夕刻、本日の御泊所である安城市愛知青年師範学校にお入りになった。御夕食後、5名の奏上をお聞きになられた。

22日の第二日目は秋雨のそぼ降る中を、大同製鋼、県立農業試験場、日本陶器と御廻りになり、名古屋市の引揚者収容施設に入られた。バラック建ての施設には千数百名が収容されていた。陛下は、それぞれに御慰め、いたわりの御言葉をかけて廻られる。朝鮮、満州から着のみ着のまま、幼児や乳飲み児を抱えて帰ってきた人々は、陛下の御言葉に声も出さず、流れ落ちる涙を手で押さえ、顔も上げ得ない。陛下は市役所に御成りに成るべく、近くの大津町で御車を降りられ、雨の中を笠もなしで玉歩を進められた。陛下が動き始められると、奉迎者たちはドツとばかりに陛下をめがけて押し寄せて身動きも出来なくなった。

その奉迎者の中にわが師影山正治大東塾初代塾長もおられて、この時のことを機関紙「不二」に次のように発表している。>この日は雨であった。自分もまた人々の中に混じり、雨に濡れながら、一時間半ばかり心澄ましめてお待ち申し上げた。時がたつにつれて刻々と人が増加し、おなり間近には数万あるいは十数万の人々が沿道の両側にそれこそ十重二十重に立ち並んでいた。御警衛と申すべきものは何もなく、ただ所々に無腰の警官が立っているだけであった。御予定の時間をやや遅れて御召車がお着きになった。陛下はすつくと雨の街道にお降り立ちになられた。新聞に伝えられていた通りの御服装であった。それまで鳴りを潜めてきちんと沿道の両側に立ち並んでいた奉迎者たちは、「万歳、万歳」を絶叫しながら一時にドツと陛下の御真近にお寄りしていった。きちんと座って拝したいと思い最前列に腰を据えていた自分も、それどころのさわぎではなく、なだれの如き人々に押されてほんの一間足らずの御身近にまで押し出されてしまっていた。黒山の如き人波の真只中を陛下はお笠も召されずに帽子を取られ御微笑みを含ませられながら左右親しく御会釈を賜りつつお優しく、しかも凜としてお進みになられた。感極まった自分は、万感の一念に込めて、ただ一声「天皇陛下万歳」を唱えまつて低頭した。そしてしばらくは天に響く「万歳」の歓声と、ゆり動く群衆の波濤にもまれながらあふれくたる熱い涙を拭うことも出来なかった。君と民は、時雨の雨に濡れながら、完全に一枚になって、おのずからに日本を息づき、日本をいとおしみ、日本を感じていた。それは誠に神ながらの姿であった。泣いている人々も目についた。市役所には入られてからも大部分の人々はなかなか立ち去ろうとはしなかった。そして御昼食の後、約一時間を経て市内御巡視にお出かけになられる陛下を再び拝しようとして熱心にお待ち申し上げるのであった。自分もそれらのひとびとのうちの一人であった。

丁度その時、県庁前の広場の方で、非常な騒ぎが起こった。人々の間を押し抜けて近づいてみると、数千の人々が必殺の気迫で怒号しながら一人の男に殺到し徹底的にたたいていた。「天皇は万世一系ではない」と演説を始めた不心得者であった。「踏み殺せ、殺せ」と絶叫しながら人々は一つの火の固まりになって、どこまでも殺到していく。血まみれになった男は、ついに県庁の中へ押されていった。数千数万の人々は「殺せ、殺せ」と絶叫しながら、なおも県庁の中へなだれ込んでいく。そして男は危うい所で県警察の手により保安課の部屋へ押し入れられて保護された。警察部員が必死になってなだめて廻った。「陛下の身近で騒ぎを起こしては申し訳ないではないか」人々はようやく納得した。人々は一斉に「天皇陛下万歳」を連呼しながら表に出た。V

陛下はそれから戦争未亡人の収容施設である母子寮の昭和荘、矢田国民学校、その他を御廻りの後、名古屋に御帰りになり、御泊所である愛知県庁に入られ、御夕食後、四名の奏上を受けられた。愛知県御巡幸三日目の10月23日は県西部であった。先ず中島郡稲沢町の毛織物工場、稲沢操車場、一宮中学校等々を御視察になり、一宮市役所で市民の歓呼に応えられ、午後は宮田用水取り入れ口、県蚕糸試験場その他を御成りになり、午後五時頃、御泊所の愛知県庁へ御帰りになられた。翌24日早朝、御泊所の愛知県庁を出られた陛下は、予定に全くなかった熱田神宮を非公式に御親拝遊ばされた。これは陛下の深い思召しによるもので、関係者一同感涙にむせんだ。

京都駅前御料車十三分間立ち往生

昭和22年6月4日、陛下は早朝の7時35分東京駅をご出発、夕刻5時5分京都駅御着。御車で京都御所へ向かうべく、駅前広場から烏丸通りに出られようとした時、奉迎の群衆がワッとばかりに御車を取り囲んだ。群衆は御車にしがみつき、窓ガラスを叩いて万歳万歳と早や狂乱である。立ち往生十三分、やっとMPのジープが現れて群衆を退け、ようやく御車は動けるようになった。京都は平安朝から幕末まで千年もの都であり、昭和の御代になってからも陛下はこの古都で即位の大礼(昭和3年11月10日)、大嘗祭(同年11月23日)を行われ、それよりしばしば御所を行在所として行幸になっていた。そのたびに、京都の人々は敬虔に陛下をお迎えしていた。当局はまさかこのようなことが起きるとは全く想像していなかったため、その驚きは大きかった。

関西御巡幸の特徴は、この京都御所をベースキャンプとして朝、御所を出発し、夕方帰られように予定が立てられており、陛下は御所に7泊されたが、この御巡幸7泊のうち御所で三つの行事が行われた。その一つは、第五日目の6月9日に和歌山県の御巡幸より早めに御還幸になり、午後三時過ぎより、川田順、谷崎潤一郎、吉井勇、新村出の四人を召されて肩の凝らない座談を聞き召されたことである。次は、6月10日は日曜日で御休養日であったが、午前に関西の各大学の総長を召されて、それぞれの実状を御下問になり、午後には生物学者を召され、その研究成果を聞かれたことである。三つ目は、御巡幸最終日の6月14日、御所を解放され京都市民の奏迎を受けられたことである。所内、饗宴場跡に五万人が集まり、京都府知事、京都市長が奏迎の辞を奏上、陛下からも御言葉があり、万歳の声は御所の外までとどろいたのであった。

陛下の御目、涙にぬれて光る

6月11・12・13の三日間は兵庫県への御巡幸である。御巡行第一日目の6月11日、御召し列車は10時40分、神戸駅御着。大阪商船ビルの屋上より神戸港と市街地を御展望になられた。この日、「占領軍司令部は8月15日より貿易再会許可」の報が入った。御巡幸とこの朗報が重なったのである。国際貿易港神戸の人たちは燃えに燃えた。万歳万歳の声も高く弾む。県庁で御昼食を召され、川崎車輛、中央ゴム、国鉄鷹取工機部を廻られて工員を激励され、信愛学園では戦災孤児を、県営庶民住宅では戦災者をそれぞれ激励され、五時に御泊所の神戸一中にお着きになった。6月12日の第二日目は御泊所を9時にご出発、灘五郷の酒造組合、武庫川高女を廻られ、神戸女学院で御昼食を召されたが、ここで感動的場面が現出した。陛下が御休息所を出られると、中庭には生徒、職員、卒業生、父兄等五千人がお待ちしていた。御前で七百人の専門部学生が「讚美歌第四百十二番“祖国”」の二部合唱を奉仕し始めたのだった。

「わが大和の 国を守り あらぶる 風をしずめ 代々やすけく おさめ給え わが神」

>合唱のメロデーは薫風に乗って岡田山を静かに流れる。陛下は、次へと御促し申し上げても、そこに釘づけにされたかのように動こうともされない。歌が進むにつれて合唱する女学生からすすり泣きが起こった。しまいには、陛下のお顔を一心に見つめて歌っている女学生みんなが、泣きながら合唱を繰り返す。歌は、ときどき涙にとぎれる。見ると、陛下もまた泣いておられる。お目は涙にぬれて光り、何度もしばたたかれる。侍従長をはじめ、お付きの人々もみんな泣き、数千の奉迎者、また涙を流す。おえつのうちにつづく歌声をあとに、陛下は静かに玄關を離れさせられたのであった。それから女学生たちのはつらつな体操を御覧になり、御予定を終えさせられた陛下は、万歳の歓呼をあとに、この学院を去って行かれた。V

炎暑の東北地方御巡幸

大阪・和歌山・兵庫の一府二県の御巡幸より御還幸になったのが昭和22年6月16日であった。側近の人は誰もが、7月と8月は御静養になり、次の御巡幸は9月に入って涼しくなってからだ、と思っていた。その上、7月には福島県を除く東北6県に大水害があり、特に秋田県の被害が甚大であった。ところが陛下は、この酷暑炎熱の期に東北御巡幸を仰せ出された。驚いた側近は、涼しくなってからと御延期を願ったが、「この夏は東北を廻らねばならぬ」と御許しにならない。そこで8月5日から19日まで、流汗長途の御巡幸となったのである。このことは、御巡幸を迎える各県へ直ちに伝えられ、各紙は筆を揃えて、この度の御巡幸がまったく異例なることを第一面トップに掲げ、県民の注意を喚起した。

水害被害の最も甚大であった秋田県の「秋田魁新聞」の8月3日の記事は、次のように伝えている。>民情御視察の全国の旅を続けさせられている陛下の今度の行幸はかつてない耐熱行幸であるが、わざわざこの旅を決定されたのは「東北の運命(食糧の増産)は真夏にかかっている。東北人の働くありのままの姿を是非この目に見て激励してやりたい」との御気持からの由である。側近はおからだにさわりでもあつてはと心配していたが、陛下は「国民は皆汗を流して働いている。自分の体は心配に及ばない」と言われたそうである。その後、水害に遭って、御延期も止むを得ないだろうと心配していると、陛下は、「殊にひどかった秋田県には是非行って状況を視察激励してやりたい」と、以前なら侍従にさせられた所を御自身で行かれない気持ちをもたされて御出掛になるとのことである。

お迎えする地方では、盛り沢山の計画でお迎えするが、検分の結果何か所か取り止めになった。それでも毎朝7時、8時のお出掛けで帰りは午後5時過ぎ、遅い時は9時過ぎのこともある多忙な御日程で、車中でもお応えになるので御身体の休まる暇はほとんどない。関西の時は季節遅れの6月であったが、自動車の車内空気は外気より5、6度高く30度から35度に上がっていた。今度車中の水銀柱はどこまで上がるだろう、おそらく真昼の直射の中で御迎えする民衆より堪え難い経験をされるだろうと心配している。側近は御取替のハンカチと途中のお着換えを用意して御伴する様子である。御自身の苦痛をこうして覚悟される陛下は、その暑さに御迎えする民衆がさぞ難儀するだろうと心配されて「地方の人たちにはなるべく自由に迎えるように、学童たちをどうしても並ばせるときは日陰を選ぶように…」と行幸主務官を通じて地方庁に伝えられた。< “暑いなどと言っておられるか”という誠に厳しい切迫したこの大御心を拝し、東北人は驚愕した。

地底450メートルの常盤炭鉱の構内へ

酷暑の東北6県御巡幸は昭和22年8月5日に皇居を御出発になり、8月19日那須御用邸に入られるまで15日間続いた。酷暑炎熱の御旅であった。しかも、二夜も御入浴の設備無き御泊所があり、一日の御汗と塵にまみれた御体をタオルで拭かれるという畏れ多い御旅であった。陛下は8月5日午前7時半、東京駅御発、正午、常盤炭鉱の表玄関湯本駅御着。奏迎に応えられつつ、炭鉱に向かわれた。ここは、全国の出炭量の40%に及ぶ一大炭鉱である。陛下は説明を聞かれ、第六坑口で坑内に入る人車に乗って地下450メートルの地底へ降りられた。更に坑内を150メートルも歩かれ、居並ぶ坑夫達を激励された。坑内の温度は灼熱40度である。坑夫達は上半身裸体で働いていた。陛下は背広姿できちんとネクタイをしておられる。その半裸体の坑夫達に激励の声をかけて廻られる。誰もが涙にむせぶ。陛下が通風門にさしかかれた時、突如、万歳の声が爆発した。坑内ではあらかじめ万歳は遠慮するよう固く止められていたのだが、もうどうにもこらえることが出来なかったのである。陛下はこれに応じて人車に乗られる。やがて地上へ出られたが、陛下は流汗淋漓である。地上でも、その汗をお拭い遊ばすいとまもなく万歳の嵐が陛下をお迎えする。陛下はここでオープンカーを召され、強烈な直射日

光の中を平駅まで 30 分間、沿道の奏迎に応えられつつ進まれ、駅近くで御下車になり御歩きになった。群衆は熱狂して陛下めがけて押しかけた。警備の危険を感じたMPは、遂に威嚇射撃をしてやっとこれを鎮めた。御召列車は沿線の各駅を徐行して奏迎に応えられ、原町駅で御下車、人口の六割に当たる二万五千人の奏迎を受けられ、午後5時、仙台駅へ御到着になった。

あつさよき岩城の里の炭山にはたらく人をををしとぞ見し
この御製は、この時の御作である。

女学校の板の間にゴザを敷いて御寝

8月6日、御泊所の伊達別邸より仙台市内を御廻りになる。繁華街は名物の七夕の飾りで一杯である。中には一万円もかけたという超豪華なものもある。陛下の御成りで奮発したのであろう。厚生寮、本町小学校、国立病院とお廻りになり、石巻市に出られ、市民奏迎上で市民の歓呼を受けられ、次いで塩釜の魚市場を御視察になり、松島の瑞巖寺で御昼食。午後は女川魚市場、水産実験所を御視察、石巻、小午田を経て県立古川高等女学校へ入られた。ここが本日の御泊所である。真夏の朝8時から 10 時間、すべて御車で御廻りになった陛下は、お疲れであったが、入浴の設備はなく、たらいの水で御体をお拭きになり、御夕食後、更に五人の篤農家からそれぞれ奏上をお聞き召し、陛下も侍従長も宮内庁長官も教室の板の間にゴザを敷いてお休みになられた。これは余りにも申し訳ない次第であった。当時を回想して、入江相政侍従長は次の如く語っている。

八天皇陛下も教室の一つに、板の間にゴザを敷いてお休みになりましたし、私共お供も皆教室に泊めて頂きました。そうすると何の遮蔽もないのでございますから、朝四時頃になりますともう明るくなってしまい、しょうがないのでもう起きるということで、まあ、陛下も一生懸命東北を御廻りになって、それがなにがしか日本の復興にも役立っているのではないかと思います。私も最近少しなまくらになりましたが、高等女学校の板の間に寝たあの時の気持ちを忘れずにいようと思います。V

皇居勤労奉仕団こぞって参上

翌 8 月 7 日は古川を御出発になって、一路北上、栗原郡築館町へ入られた。この町へ御車を進ませ給う陛下の御心には、非常な御親近感と栗原郡とはどんな所かという御期待感があつた。また奉迎する方も尋常ではなかつた。郡内の各町村からは午前二時、三時ごろから山を越え、野を超えて駆けつける人々があつた。これには理由があつた。実はこの宮城県栗原郡こそは皇居勤労奉仕団発祥の地であつたのである。終戦の年の秋、草茫々の皇居前の惨状を見るに忍びず、恐る恐るその草刈りを申し出たところ、思いもかけず、外よりも内をやっていただけないかということで、昭和 20 年 12 月 8 日、この栗原郡の成年 62 名の「みくに奉仕団」が団長鈴木徳一氏、副団長長谷川駿氏に引率されて皇居の門をくぐつた。当時、天皇の為に働く占領軍に検挙されるかもしれぬと、水杯までして決死の覚悟で上京してきた青年等であつた。

その作業中、突如、陛下がお出ましになり、「遠い所を来てくれて御苦労である」との御言葉を賜り、「栗原郡とはどんな所か」「稲作はどんなであつたか」等々の御下問があつた。このことはたちまち郡内に伝わり、第二次、第三次と奉仕団が続々と上京、奉仕。その都度、陛下より御労いの御言葉と御下問があつた。奉仕者の数はその頃すでに 15 団体一千名にも達していた。従つて、その家族や親族を入れれば何千という人が、皇居勤労奉仕を通じて陛下の御仁愛を心の底から感じ取つていた。その我らが陛下が、この東北の一僻地へやって来られる

のである。彼等は夢ではないかと喜んだ。そうだ、これは陛下御自身の御意志でのことだと感激し、感涙した。彼等は未明に起きて、この築館町に続々と集まってきた。やがて陛下の御車が到着した。小学校の校庭と、同町内の薬師山公園の奏迎場でいずれも群衆は熱狂して、我らの陛下をお迎えした。陛下もにこやかに御手を振られた。青年団長は「勤労奉仕にたびたび参上しております。又近いうちに参上します」と言上した。陛下も、この地に一時間以上も御足をとどめ給え、この民草の至誠を心ゆくまで御受け遊ばされ、御機嫌うるわしく岩手県へと向かわれた。ちなみに、この「みくに奉仕団」によって始められた皇居勤労奉仕は今日まで絶えることなく続いている。この御製二首は、皇居勤労奉仕団に賜ったものである。(昭和 20 年 御題「皇居内の勤労奉仕」)

戦いにやぶれしあとのいまなお民のよりきてここに草とる
をちこちの民のまいきてうれしくぞ宮居のうちにけうもまたあう

二キロの山道を御徒歩で満州生き残りの開拓団へ

陛下は、昭和 22 年 9 月 8 日に栃木県下の御巡幸を終えられて一か月後の 10 月 7 日、甲信越 9 日間の御旅に皇居を御出発になり、同日午後 1 時過ぎ、長野県軽井沢駅に御到着。この御巡幸の最初の玉歩を浅間山麓の開拓部落に印せられた。そこは浅間山の南麓、標高 1095メートルの高原にある戸数五十戸の大日向開拓村であった。この日は浅間山に初雪が降り、底冷えのする日であった。昭和 22 年の 2 月 11 日紀元節の日を期して入植し、開墾、鋤一本で開かれた十二町歩の畑には真白なソバの花が咲いていた。陛下はこの山の中の凸凹道を二キロも歩かれて部落に到着された。開拓民二百七十名は皆泣いて陛下をお迎えした。陛下は、なぜ二キロも歩かれて、この僻地へ玉歩を運ばれたのであろうか。

この開拓地は普通の開拓地ではなかった。ここは、昭和 12 年に長野県南佐久郡大日向村の二、三男が満州国吉林省へ分村入植、「満州大日向村」を建設するも、終戦によって引き上げた方々が新しく入植し、開拓に励んでいるところであった。こう書くと何でもないように聞こえるが、ここには終戦による日本人最大の悲劇が秘められていた。陛下が急造の悪路を二キロも歩かれて、ここを御訪ね給うた大御心を知るためには、どうしても満蒙開拓団の悲史を略述しなければならない。昭和初年、日本の農村は貧困のどん底にあった。当時、大日向村は一戸当り、田畑合わせて耕地面積はわずか五反で、頼みの炭焼きも原木をほとんど伐採し尽くしていた。村の半分が満州に行けば何とかなる。こうして村の二、三男が中心となり政府の満州開拓移民政策に夢を託し、全国最初の“分村移民”を実行した。全国の寒村がこれに続いた。これとは別に、15 歳から 18 歳の少年で組織された独身者のみの「満州開拓義勇軍」があった。終戦時には両者合わせて二十二万三千余名が在籍していた。昭和 20 年も豊作が予想された。その実りも近い 8 月 8 日、ソ連は日ソ不可侵条約を一方的に破棄し、翌 9 日未明よりソ満国境全域からなだれを打って侵入を開始した。殊にラジオもない辺境の開拓団では日ソの開戦も知らず、終戦も知らず、事実を知った時はぽつんと荒野の真只中に置き去りにされていたのが実状であった。ソ連軍や現地暴民に襲撃されて全滅する団、集団自決する団、半数が虐殺される団、婦女子幼児等がバラバラになって行方不明になった団等、まことに目を覆う惨劇が次から次へと繰り広げられたのであった。犠牲者総計八万五千名。実に三人に一人強の犠牲であった。大日向開拓団も例外ではなかった。団員六百九十四名のうち、生き残ったのは半数の三百二十三名であった。この人たちがようやく母村に文字通りたどり着いたのは、昭和 21 年の 9 月であった。この生き残って母村に帰って来た人達も、母村では食べていけない。新たな開拓地を探さなければならない。こうして隣郡の浅間山麓標高 1095メートルのこの荒れ地に、全くの無一物で入植したのである。

陛下をお迎えした堀川源雄団長の奏上は幾度となく涙で途絶えた。陛下の御眼もうるみ給うた。開拓団の人々は陛下がお出でになるという知らせを受けて、皆泣いた。そうして慌てて御通りになる道を、木の伐採から始めて急造した。今でもその道は「天皇帝」と呼ばれ、毎年10月7日に「御巡幸記念」の行事が今に続けられている。陛下はこの時の御感慨を、

浅間おろしつよき麓にかへりきていそしむ田人たふとくもあるかな

と御詠み遊ばされている。これは大日向村引き揚げの人々のみならず、全国の同じ境遇にある方々に賜ったものと拝する次第である。陛下は同夜は軽井沢の近藤別邸に御一泊になられたが、夜、四人の専門家を召されて植林、発電、開拓、治水について座談会を聞き召された。

米俵の奏迎アーチをくぐられて

10月8日午前7時半、軽井沢駅を出発した宮廷列車は一路北上する。途中、長野、直江津、長岡、新津の各駅に御停車、奏迎の人達に迎えられたが、沿線すべて奏迎の人で陛下は車窓に立たれてそれにお応えになり、寸暇もお休みになれない。直江津駅で35分停車し、その間に御昼食を召された以外はほとんど御立ちであった。果てしなく黄金の波うつ蒲原平野を御展望になりつつ御満悦遊ばされるうちに、午後4時20分、列車は新潟駅ホームに滑り込んだ。駅頭での万歳の嵐に応えられつつまず県庁に御成りになり、屋上より市街を御覧になった。新潟は空襲を受けなかった数少ない都市である。陛下「ここは戦災を受けなかったの」知事「港口の機雷被害のみで、市街地は無事でした」陛下は知事のこの答えにニッコリと微笑された。市民奏迎場の白山総合グラウンドには五万の人々がお待ちしていた。君が代、万歳の嵐、陛下は何度も帽子を振ってお応えになり、この日の御泊所である知事公舎にお入りになった。

第二日目の10月9日は午前8時、御泊所ご出発、先ず新潟医大に御成りになった。ここでは地方病ツツガムシの病原体の研究を熱心に御聴取遊ばされた。次に新潟港に着かれ、天皇旗燦とはためくランチに御移乗、水揚げ場を廻って漁夫を御激励になり、帝国石油では天然ガスの噴出状況とボンベへの充填作業を御覧になり、新津駅より列車で県北へと向かわれた。山形県に近い村上駅で御下車、町民奏迎場に臨まれ、これより南下、岩船郡では米俵アーチの奏迎門を通過して神納・西神納両村の農業倉庫にお入りになった。そこには一万四千俵の新米がギッシリ積まれていた。この新米の山を御覧になった陛下のお顔は御満足そのものに拝せられた。更に北蒲原郡加治村では農道を200メートル御徒歩で歩かれ、一家六人の収穫作業を天覧遊ばされた。精米機から流れ落ちる新米を手にとって御覧になり、「肥料が少なくて困ろうが頑張っただけ」と激励され、次いで国立新発田病院、柴田奏迎場に御成りになったのち帰途に就かれ、午後5時20分、新潟御着。9時間にわたった御予定の全てを終えられ、御泊所の知事公舎に御入りになられた。

第三日目の10月10日は雨であった。午前8時秋雨の中を御出発、この日は県中部の御巡幸であった。先ず西蒲原郡の農家にお立寄りになり、雨傘を御手に畦道を歩かれて脱穀作業を御覧になり、巻町の県立種鶏場を経て信濃川の大河津分水の堤上200メートルを御歩きになって御視察、燕町では対米輸出品として脚光を浴び始めた洋食器工場を激励され、三条市大谷派別院で御昼食。午後は長岡市奏迎場で市民の歓呼に応えられ、県立農事試験場を御視察後、長岡の繁華街を再び200メートル御歩きになって長岡より列車で柏崎に御到着。柏崎では市民奏迎場で市民の熱誠を受けられ、新潟診療所で入院患者を慰められて刈羽郡高田村の旧家飯塚知信邸に入られたが、その頃には秋の日はとつぷり暮れて真っ暗になって居た。奏迎の人達は暗い中で、御

召車のライトをめがけて万歳を唱えるが御姿は見えない。陛下はその闇の声の方に向かって、帽子を御振りになって答礼遊ばされたのであった。

第四日目 10月11日は御休養日であった。これまで四日間の超強行軍の御旅の疲れを癒されるため、公式の御外出はなかった。午前中、陛下は少人数の御供だけでお忍びで飯塚邸の裏口からこっそり出られて山道を散策された。間もなく新聞記者やカメラマンが気付いて追いかけて来た。そこに村娘の宮島トミ、今井スミさんの同級生二人がいた。誘い合わせて蓑を着て朝からキノコ採りに山に入り、竹籠に一杯取ったので山から降りて来た。そこへカメラマンが飛んで来て、陛下だと告げた。もう陛下はそこまで来ておられる。山道は片側は崖、片側は山で隠れる処がない。慌てて笠はとったが蓑まで脱ぐ時間はなかった。陛下は傘を御手に長靴姿で、二人の姿を認められると、ツカツカと近寄られて竹籠を除かれて「これなにネ」と、一つ一つキノコを御手に取って名を御尋ねになった。二人は「ズボダケ」「アワタケ」等お答えすると「いっぱい採ったね、気を付けてね」とお褒めになった。まことにほほえましい、陛下と村娘のふれあいであった。第五日目の 10月12日は午前7時半、御泊所の飯塚邸を出られるにあたって、当家の二十二歳の息女に「手料理ありがとう」と御礼を述べられた。この日は黒井沢で信越化学工場を御視察、富山県に近い頸城地方の奏迎を直江津市、高田市で御受けになられ、再び長野県に入られた。

泣きじゃくる孤児たち

10月12日、新潟県御巡幸を終えられた陛下は、この日再び長野県に入り給え、長野市を通り越して午後2時近く上田市に御到着になり、千曲川に沿って北上された。先ず上田奏迎場で三万五千人の熱誠に応えられた。屋敷奏迎場では、かつての松代大本営に收容されている恵愛学園の戦災孤児十七名が遺族席の最前列に並んでいた。陛下が奏迎場にはいられ、孤児たちを認められツカツカと近寄られると、>「みんな明るい気持ちで元気にやってね」とお声をかければ、みんな小さいコブシを顔にあてて泣きじゃくり近くの婦人たちも思わずハンカチを眼にあてる。孤児なればこそその涙・陛下のお姿を見て亡き父母や兄弟の悲しい面影が幼い胸によみがえったであろう。大川利夫君(12歳)と長島一三君(13歳)に感想を聞けば、「うれしくて、うれしくて」と言ったきりあとはただ泣くだけであった(信濃毎日新聞)という状況であった。次いで篠ノ井町の酒井リンゴ園に御成りになり、長野県蚕業試験場からはオープンカーで長野市内奏迎の人波に応えられつつ、この日の御泊所になっていた善光寺大勧進に入られ、夜は4名の奏上を受けられた。

10月14日、長野県御巡幸の最後の日塩尻・諏訪地方であった。御泊所を御出発後、三か所御視察になって塩尻奏迎場で群衆の歓呼に応えられ、明治天皇の御巡幸碑の立つ塩尻峠に立たれて諏訪湖周辺を御展望になった。生憎、昨日につづきこの日も北アルプス連峰は雲に隠れて姿を現さなかったが、東南の八ヶ岳、富士山はその雄姿を現してくれた。ここで御乳人矢野しげ(当時73歳)さんがお出迎えした。かくて、諏訪奏迎場で一万五千人の奏迎をうけられ、12時50分、上諏訪駅発に御乗車、四日間にわたった長野県御巡幸を終えられ山梨県へと向かわれた。

荒ムシロ敷きの部屋に入って御激励

上諏訪駅を発した宮廷列車は秋たけなわの甲斐路に入り、各駅ごとに居並ぶ人々、そこかしこの田畑に立って会釈する人々等の誠あふれる奏迎を受けられつつ、10月14日午後2時22分、韮崎駅に御到着、山梨県に玉歩を印された。先ず御視察されたのは御勅使川復旧工事現場である。山梨県も大水害を受け、その爪痕がい

ちじるしい。ここもその一つである。これより巨摩高女校庭の奏迎場に向かわれる。ここには中巨摩、南巨摩、西八代、西山梨、北巨摩より三万人の人々がお待ちしていた。御召車が見えるや期せずして、「君が代」の声が起こり、万歳の嵐である。次の御視察地は山梨県の風土病(日本住血吸虫病)の発生地となった玉幡村(現竜王町)で、研究の権威杉浦博士の説明を聞かれた。この病気は田に無数にいる宮入貝に病原虫が寄生して発病する地方病で、農民が犠牲になって居た。しかし、最近ワクチンが開発されて死亡する者はほとんど無いとの御説明に御安心になった。その後、甲府の立正光正園で幼児たちの遊戯を御覧になり、県庁広場の県市合同奏迎場に臨まれ、県庁屋上から甲府の復興状況を視察され、次いで山梨工専に御成りになり、5時、御泊所の湯村温泉常盤ホテルにお入りになった。

翌10月15日は朝7時30分に御泊所を出られ、国立甲府病院に御成りになり、各病室を廻って戦傷者、戦病者を御慰めになった。次いで、隣接する旧六十三部隊に収容されている戦災者を激励された。

そこは畳などない荒ムシロ敷きの部屋であった。「苦しいでしょうが、どうか明るい生活を送ってね」陛下の御言葉に、戦争犠牲者たちは泣き伏すのみであった。

次にオープンカーに御乗換えになり、沿道の歓呼に応えられつつ春日小学校を経て市街に出られ、酒折、山梨の各村を通り、県内で水害の一番ひどかった日川村に入られた。

一輪の野菊かざして大みゆき仰ぎまつれば涙し流る (影山正治)

昭和22年10月23日、早朝7時35分東京駅御発、米原を経て午後5時6分敦賀着。10時間近い列車の御旅であった。敦賀は早朝から横殴りの秋雨が降りしきっていたが、御到着の1時間も前から駅頭には大群衆が御待ちしていた。時々すさまじい突風が起こって御出迎えの人達を無情にも驟雨が叩きつける。しかし、群衆は増える一方であった。御到着と共に万歳の大歓呼が起こった。陛下はその中を、帽子を取られて会釈しながら歩かれた。この日の御泊所は三宅旅館という極めて小さな旅館で、宮内庁長官と侍従長が同室で、その他の供奉者は一部屋に三、四人はいい、洗面所や浴室も陛下が御使用のあとを、それらの人々が使うという具合であった。

翌24日は朝小雨のち快晴の中、若狭路を敦賀から自動車以西へ向かわれた。途中、三方五湖のほとりの国立福井療養所を御慰問になり、小浜に着かれた。この間は湖と峡湾が入り込み、その先に日本海の波濤が見え隠れして風景絶佳である。しかし、奏迎の民衆が到る所に堵列してお迎えするので、陛下にはそれを賞で給ういとまもあられない。そうして、実にその中の一人にわが師影山正治塾長がおられたのであった。半年前の4月29日、天長の嘉節をトして終戦に殉じた大東塾十四士慰霊のために全行程徒歩の旅、千里行脚に出られた影山塾長は、東海、近畿、四国、山陽を経て、炎暑の九州を7月29日から9月18日まで52日間かかって一巡され、山陰道に入られ、一路東進し、附添は佐藤宇助君(現談山神社宮司)であった。10月5日、隠岐に渡って後鳥羽上皇御火葬塚、後醍醐天皇黒木御所跡を拝され、10月12日、鳥取県東伯郡三朝町の津村満好烈士実家に、次いで翌13日、同郡長瀬村(現羽会町)の福本美代治烈士実家に、それぞれ故人を祀り、遺族を慰め、次は石川県の金沢市に近い牧野晴雄烈士実家へ向かって、時雨にぬれつつひたすらに東進中であつた。

その紀行文「千里行脚の記」に、この日のことは次の如く記されている。^今日ここに、陛下の行幸を拝し得ようとは、今の今まで想像もしていなかったことだけに、歓喜胸に溢れ、ぞうりの足おのずからに踊る。雨次第に上がる。街道の清掃行き届き、人々の顔も明るい。この乱世の極みに於ても、名もなき民草の間には、今尚熱き恋闕の思いが、非常に深く確かに守られている。9時過ぎ、北川の堤上に至る。神谷橋に近き路辺草上を選んで位置する。次第に奏迎の里人集まる。水清く山々すがし。天ようやく晴れる。御警衛頗る手薄。10時、サイドカー

を先駆とする自動車数台が進み来たらる。佐藤君と二人、草上に正座。ぞうりを脱ぎ、杖を横たえ、伏拝して迎えまつる。わが胸間に野菊一輪をかざす。二両目、朱塗りの車が御召車。仰ぎまつれば金色の菊花御紋章。燦として輝く。特異なる我等兩名の奏迎に、特に御目をとめさせられ、龍顔うるわしく、しきりに御帽子を振らせらる。思えば東都出発の前日、陽春 4 月 28 日、宮中勤勞奉仕に際し、拝喝を賜えて御下間に奏答しまつる。爾来ここに 180 日、つぶさに山河千里を踏みたどり、はからざりき山陰晩秋の野に、再び御旅中の龍顔を拝しまつらん、捧げしいのち生きて今かく有る。一に至尊のましますあればこそ。しぐれの雨くまなくはれて澄みとおりに若狭国原をいまゆかすなり。

一輪の野菊かざして大みゆき仰ぎまつれば涙し流る

旅ゆかす深きみ心身にしみてねのみし泣かゆ旅にしあれば

偶然ではない。天はこの敗戦悲愁の日に、山紫水明、一天快晴の若狭路の一隅に、かなしくも美しい君と民との思わざる御出会いを用意し給うたのである。

御巡幸と占領軍

天皇御巡幸を占領軍が許可したのは、占領軍には占領軍の思惑があり、それなりの計算があったからである。「眼鏡をかけ、近眼で、猫背の小男を見れば、国民の天皇に対する信仰も崩れるだろう」「ヒロヒトのお陰で父親や夫が殺されたんだからね。旅先で石の一つでも投げられりゃいいんだ」「ヒロヒトが四十歳を過ぎた猫背の男ということ日本人に知らせてやる必要がある。神様じゃなくて人間だということをね」「それが生きた民主主義の教育というものだよ」このような会話が当時GHQの高官の間に交わされていたという記録は、占領軍の政策がハッキリと天皇の権威の失墜にあったことを示している。

ところが御巡幸が始まってみると、彼等の期待は全く裏切られた。彼等は驚く以外になかった。陛下が玉歩を遊ばされるところ、御姿を仰ぎ、御言葉を拝し、泣かぬ民はなかった。民は声をかぎり「天皇陛下万歳」を絶叫して止まなかった。禁止されている日の丸(占領軍は昭和 20 年 10 月 1 日に使用禁止、翌年、宮中行事に基づく祝祭日にのみ認め、同 24 年 1 月 1 日全面許可)も、手製のものがあちこちで振られた。いたる所に土下座して陛下を拝む人々がいた。中には飛び出して直訴する者もいたが、平伏して差し出す書状はすべて「臣下として申し訳なかった、お許してください」という御詫び状であった。驚いたことには、天皇制廃止を叫ぶ共産黨員も、陛下が近づかれると「天皇陛下万歳」を絶叫したのであった。名古屋では「天皇は万世一系ではない」と演説した男が大群衆に袋叩きにされ、血まみれになり、殺される寸前に危うく警察に助けられるという事件もあった。

占領軍当局は、天皇と国民の結びつきがこれ程に固いものだとは知らなかった。御巡幸には、常に占領軍の大佐級の高官と連合国側の新聞記者が同行したが、この状況を逐一報告したのは勿論である。彼等が期待した“人間天皇のおひろめ”などということは最初から吹っ飛んでしまい、神のごとき天皇、人間でない神様であるという国民感情が爆発して、もう手も付けられない光景が次から次へと展開するのに脅威を感じ、恐ろしくさえた。GHQの内部には、当初から天皇制に対してG II (参謀第二部)とGS(民政局)の対立があった。G II は天皇制を日本占領に利用しようとする派、GSは日本民主化のためには天皇制を廃止しようとする派であった。こうなると、今迄御巡幸に反対していたGSが黙っていない。GHQは御巡幸中止の方向に動き出した。しかし、中止の理由がない。いかに占領軍といえど、天皇が歓迎され過ぎるから中止とは言えない。そこで、御巡幸を徹底的

に監視し、少しでも占領軍の指示に違反の事実はないか、御巡幸批判の具体的根拠がないかを調べあげ、それを理由に御巡幸中止に持っていかうという方針を決めた。

このように御巡幸をめぐる占領軍との関係が大きく変化したのが、昭和 22 年 11 月下旬から 12 月上旬へかけての中国御巡幸の時であった。11 月 25 日付の中国新聞の小さな困み記事に「五十川(岡山県)総務部長は宮内府と打ち合わせの結果、今回の御巡幸は県民が国旗を掲揚したり、手紙を持ってお迎えすることは禁止された」とあるが、これは御巡幸に先立って占領軍当局から宮内府に厳重な注意があり、宮内府から、これを県当局に申し渡したもので、他の新聞に記載はないが、鳥取、島根、山口、広島各県総務部長も上京し同様な支持を受けた筈である。占領軍は当時、国旗の掲揚を許可していなかった。しかし、その取扱いは各県の占領軍軍制部長にまかされていて、その許可があれば掲揚出来たが、その対応はまちまちであった。それを今度は全面禁止にしたのであった。もし違反があれば、これを理由に御巡幸を禁止する腹であった。占領軍はこの中国御巡幸の御目付け役として、全行程を民政局員ポール・ケントを特別に同行させたのであった。

御製 わが国の紙見てぞおもふ寒き日にいそしむ人のからきつとめを

中国御巡幸の第一日目は昭和 22 年 11 月 27 日であるが、陛下は、前日の 11 月 26 日に皇居を御出発、同夜は京都御所に御一泊され、27 日午前 8 時 30 分、京都駅御発、途中、福知山、豊岡で奏迎を受けられ、午後 2 時、鳥取駅に到着された。当地は朝から氷雨が降っていたが、御到着の頃は初雪となっていた。鳥取市奏迎場には雪の中を一万五千人がお待ち申し上げていた。万歳の嵐の中を国立鳥取病院、鳥取育児院を御見舞になり、再び列車で上井駅まで就かれ、そこからは御料車で御泊所の三朝温泉・依山楼岩崎に入られた。

第二日目の 11 月 28 日は、昨日の雪に変わって小春日和の快晴であった。この日の御巡幸は県西部、いつもの如く寸暇もない御予定で、御泊所—国立三朝温泉療養所、旭村村立授産場—倉吉市奏迎場—成徳小学校—倉吉市母子寮—同家畜市場—郡製紙倉吉工場—御昼食—逢坂開拓団—米子市奏迎場—御泊所・坂口平兵衛邸—夜、県下の林業と木炭について二名の御進講というスケジュールであった。倉吉市奏迎場万人、米子市奏迎場では一万二千人の奏迎を受けられ、全部の御予定を懸命にこなされ、御泊所に入られた頃は初冬の日はとっぴり暮れていた。前掲の御製は東伯郡旭村村立授産場を御視察の折の御作で「鳥取県行幸誌」は、八東伯の山ふところ、もみじも一際美しい授産場とはいっても、和紙抄きの小さな工場、働いているのは遺族、引揚者、戦災者である。陛下は、ふとおたちどまりになり、紙をすいている岸田辰巳君(19 歳)におたずねになる。「どこから帰ってきたの」「満州の開拓団でございます」「そう、大変だったね。でも、よく帰ってきたね」「はい」「苦しかったらうね」「・・・」岸田君はもう答えられない。頭を深く下げるばかりである。V この岸田君は年齢からして満蒙開拓義勇軍の出身であろう。長野県大日向村での御製といえ、この御製といえ、満州開拓団の悲劇にいかにも大御心を痛めましたかをひしひしと感ずる御製である。この旭村は、地図を見てもわからないような寒村であった。第三日目の 11 月 29 日は朝から雨であった。御料車で日本海に突き出ている境港まで行かれ、再び米子に戻られて午後島根県に入られたが、冷雨しづく中を相当の距離を御歩きなされたので御靴は泥にまみれ、御ズボンに跳ね上がり、御帽子からは雨露がしたたった。

御製 古い人をわかき田子らのたすけあひていそしむすがたふととしとみし

11月29日鳥根県に入っても冷雨は降りしきり、止みそうにない。安来、揖屋を経て松江市奏迎場に至るまで、六か所の病院、学校、工場などを巡られて奏迎場に入られた。この奏迎の様子を地元の新聞は、>二万の大群衆は降りしぶく雨の中にずぶ濡れであったが、誰一人傘をさそうとする者はなかった。陛下は市民の熱狂に応えて御帽子を何度も何度も振られるが、その袖口から容赦なく雨が降りかかり、ズボンも靴も泥にまみれていた。Vと伝える。

かくして鳥根県庁を経て、玉造温泉の御泊所・保性館に入られた。

11月30日は、昨日とは打って変わった秋晴れの日であった。元海軍航空隊大社基地跡の新川開拓地では、同地方の人々三万人の奏迎に応えられ、伊波野村では湿田の裏作のための高畝作りの作業を天覧になられた。この時、農業会長は村人の中に混じって働いている一老父を指して、「彼は我が子を二人戦場に失って働き手はありません。しかし、少しも屈することなく、老体をひっさげて働いております。村人も挙げて彼等を助けいたわっております」と言上した。陛下は彼等を近く召されて御慰めの御言葉を賜ったが、鳥根県の御巡幸を終えられ、山口県へ入られる時に侍従を通じて、「この度は大事な二人の息子を失いながら、猶屈せずに食糧増産に懸命に努力する老農の姿を見、一方又、これを助ける青年男女の働きぶりを見て、まことに心うたれるものがあった。このような涙ぐましい農民の努力に対しては深い感動を覚える。いろいろ苦しいこともあるが、努力を続けてもらいたい」との優渥な御言葉があり、後日、知事が葉山御用邸に御礼言上に伺候した時に、陛下より賜ったのが先の御製であった。

出雲大社に正式ご参拝

陛下は11月30日正午、出雲大社に御到着。モーニングに御召しかえられ、千家宮司の御先導で神前に御参進、正式御参拝をされた。そうして本殿西廻廊前に三十一年前に御参拝の折、御手植えになられた松が緑の色も濃く大きく育っているのを御覧になり、勅使館で御昼食を召された。当時、大社の御社殿は御屋根なども大分朽ちて荒廃の姿が著しかった。昭和20年12月15日に神道指令が発せられて満二年、陛下の御心の中いかにばかりかであらせられたであろうか。

この大社の町では家毎に幔幕を張り、軒提灯を吊るし、旗を掲げて御迎えしたが、その旗が「日の丸」のように見えたので関係者が驚いた。前述の如く、日の丸の掲揚は昭和23年12月31日まで厳禁されていたからである。しかし、よく見るとそれは、出雲の“出”をデザイン化して白地の真ん中に赤く染めたもので、大社町旗であった。日の丸の旗の替りにこの旗を掲げたのである。これは国民の占領軍への無言のレジスタンスといえよう。これとは別であるが、ある所では「奏迎」という字を丸型に意匠して、白地に赤く染めた小旗を打ち振っているところもあった。いずれも権力では抑えられない恋闕の至情の発露である。同行の占領軍の御目付け役は、これをどう見たであろうか。

重症結核患者に御言葉

昭和22年12月1日午後4時、御召列車は山口県東萩駅に御到着。雨が止まない。市内の二か所を御視察になり、奏迎場に向かわれる。そこには雨中に約三万人がお待ち申し上げていた。たちまち起こる万歳の嵐に何度も応えられ、御泊所の毛利別邸へ入られた。夜は田中知事から県政一般の奏上を受けられたが、御顔色が大変御悪く、御熱もある。侍医は御風邪であると頻りに御案じ申し上げるが、陛下は「心配ない。奏迎の人達を思えば、何としても日程の変更はしたくない」と仰せられる。山陰路は一日おきに激しい雨で、特にこの日は終

日激しい雨で、ずぶ濡れになられたのだ。御無理がたたったのである。これから未だ前途は長い。供奉者一同の心配は一入であった。ただ幸いなことに、明日は午前中の半日が最初より御静養に充てられていたことであった。

12月2日、夜来の雨は晴れた。午前中の御休養によって陛下は、幸いすっかりお元気をご回復遊ばされた。午後零時半、御泊所を御出発。途中、長門市で同地方民の奏迎を受けられ、小串の国立山口病院を見舞われた。この病院でのことである。病院の重症結核患者部屋には十二名の患者がいた。彼等は「重症なので、とてもお目にかかることは出来まい。せめて部屋のガラスをきれいに拭いてもらいたい。庭の草をきれいに撮ってもらいたい」と院長に願い出た。院長がその心情に打たれ、行幸の責任者に訴えたところ、思いもかけずこの重症部屋への御見舞が決まったのであった。看護婦さんに清掃を頼み、一日千秋の思いでこの日を待ったが、二人がその日を待ちきれずに「残念だ」「残念だ」といいながら逝去した。この日、陛下のお優しいお見舞いの言葉を拝した同室の患者等は、部屋の片隅に飾られた友の写真に向かい号泣して「陛下のお声が聞こえたか」と呼び掛けた。看護婦も泣き、関係者も皆泣いた。

泥んこの山道を三十分も歩かれて

12月3日は先ず下関漁港、大洋漁業の冷凍工場を視察され、零下8度という冷凍室へもサッと入られて中に3分間もおられたので、侍従らは驚いた。下関から長府、小野田、宇部、小郡と各地を巡られ御泊所の毛利本邸（防府市）に入られたが、特に宇部の沖の山炭鉱では長い長い工員、坑夫の列の前を御歩きになり御激励の御言葉を賜った。

12月4日は先ず吉敷郡仁保村の中郷開拓地へ就かれ、地元中学校校庭で奏迎を受けられたのち、御靴も御ズボンも霜どけで泥んこになるような山道を、三十分も御歩きになって、開拓地へ就かれた。ここには戦災者二十世帯が入植していた。こんな山奥まで天皇様がお出でになるとは、最初は誰もが思っていなかった。陛下の「よく帰って来たね」の御言葉に感極まって、思わず霜どけの大地に土下座する引揚者もいた。貧しい開拓住宅をも一軒一軒廻られてお声をかけられたが、涙で誰も良くお答えできなかった。御帰りは歩行も困難なほど更にぬかるむ悪道を平気で歩まれて、山口市へ向かわれた。

山口市では三万余の赤誠の奏迎を受けられ、いつもと同じように遺族、戦災、引揚、傷痍者等々に御慰めの御言葉をかけられ、県庁その他を経て防府に帰られ、市民の奏迎を受けられつつ毛利本邸に入られ、ここで杉、赤松などの種を御手播きになられた。12月5日は三田尻駅御発。徳山、柳井、岩国で盛んな奏迎を受けられ、国立岩国病院を御慰問になり、広島県に入られた。